

キャンパス・コラム

「1を聞いて10を知る」

わが国では、「論語」に書かれている「1を聞いて10を知る」という考え方が広く行き渡っており、他人がすべてをいわずとも、その先を読み、先回りして、行動することが長い間是とされてきました。したがって、日本人社会では、「1を聞いて10を知る」ことができない人は、どうも「優秀なやつではない」とか、「切れないやつ」などという烙印を押されてしまうことが多かったように思われます。

ところが、調査でアメリカやアジアへ出かけて妙なことに気づきました。それというのは、アメリカでは、(そうでない人もたくさんいると思われませんが)単純化して言いますと、「1を聞いて1を知る」という考え方が多いということです。つまり、会社でも、どこでも上司や他人から何か言われれば、言われたことだけ理解し、行動すれば十分であるという社会のよう

なのです。

一方、アジアで気がついたのは、アメリカのように、「1を聞いて1を知る」という考え方をする人が、国を異にしたとしてもかなり多くいるということです。そうではないといえば、韓国の人々が日本人の考え方に近いかもしれません。

良く考えてみますと、最近学生と話をしているとき、学生がそのように考えていると思うことがよくあります。また、ファースト・フード店やコンビニエンス・ストアで多くの学生がアルバイトをしています。そのすべてがまさにマニュアル通りで、それ以外はできないといっても過言ではありません。つまり、1~10までいわなければわからないということです。こうなると、日本も近い将来にはグローバル化して、まさにみんな同じになってしまうかもしれません。

とうとう、そこまできたかと思うと、おじさんたちはちょっと寂しい気持ちになってしまいます。

広報委員 奥本 勝彦(商学部教授)

モノレール「立川南」中央大学・明星大学」間の17分が少しも遅延しない時。まさに今なのです。稲刈りを終え、ひと休みしている田んぼ。それを取り囲む木々から鳥が飛び立つたびに、数枚の葉がハラハラと落ちていきます▼高幡不動を歩くと、紅色や黄金色の彩りを添えた丘陵が間近に迫り、それは息を呑むほどの素晴らしさです。多摩動物公園では、遠足の園児の声が青空にこだまし、傾斜地には行儀良く建っているカラフルな住宅が、晩秋の日差しを浴びています。「平和な風景よ、いつまでもこのままであってほしい」と願いたくなるような「至福の17分」です▼それに引き換え、世界は大混乱を引き起こしています。つい先日の新聞紙上に、フランスの人類学者が「テロが何かを変えたというより、人々が見たくなかった現実をあらかじめ」がなくなっているという現実だ」と述べています。「いや、人ごとではない」——ふと、現実に戻りました。

(広報課)

編集後記

Hakuson
ちゅうおう

2001・12月号(第171号)

2001年(平成13年)12月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12
電話 03-3631-8141